

英語音声指導の再考

島 岡 丘

はじめに

20世紀の英語学習形態は大まかに言って、鈴木寿一氏(2001)が指摘するように、「物まね的授業」であった。教室でテープを聞かせ、Listen and Repeat.のくり返しによって英語力が自然についていくという暗黙の了解があった。この方式の問題点は、なぜそうなるのかという理由とか説明の余地がないことである。つまり、学習者自らの発見的学習ではなく、テープモデルの依存型学習で受け身的な学習である。

IT時代と言われ英語学習にも教育工学の手法が取り入れられてきたが、外国語習得の素地ができていて、初めてそれらの装置が役立つのではないだろうか。本論では、外国語習得の素地は「母語の活用と音読にある」と仮定して議論を展開する。特に極東の日本語と極西の英語との間には大きな差異があるので、それをまず埋める工夫をしなければならないと思われる。

1. 英語のアルファベットと日本語のカタカナ

未習の単語、例えばlabialを見て、平均的な日本語話者は「lérbial」(近似カナ:「ヌレイビアウ」)と発音できる英語学習者は少ない。「ラビアル」とか「ラビヤル」のように言うのはまだよいほうで、大抵はその発音に触れないで、意味だけを知ろうとする傾向が強い。この状況が何年も続くとどうなるかと言えば、英語の学習は発音を無視し、単語の意味を頼りに読解するという文字偏重の学習パターンが生まれる。その結果、音読という極めて重要な学習が行われないままになってしまう。

英語の発音を意識の中心に置かないというのは言葉の学習の本来の姿に反する状況である。子どもの母語習得でもそうであるが、まず子どもは音から入り、文字は音声体系がかなり確立してから習得する。

21世紀の外国語教育は言語習得の本来の姿に立ち返って、英語教育の「構造改革」する必要がある。

平成13年度から使われる教科書7種を見ると、共通してアルファベットから始まっている。しかしどの教科書を見てもアルファベット文字の発音を明示したものは皆無である。学習者は、教師のモデルのもとに、アルファベット26文字の名称を覚え暗唱することになる。アルファベットを読めない高校生がいるということも耳にするが、アルファベットの26文字を何らの手がかりなしに覚えさせるという第一歩から改革していく必要がある。

2. アルファベット文字の発音の手がかり

アルファベットを発音する手がかりは、初心者はカナ文字しかない。しかし、カナ文字

は日本語であり、英語の音を正確に伝えることができない。そこでカナ文字を英語らしく発音できる手段として活用できるように、工夫する必要がある。筆者が関係している英語発音表記学会（本部：茨城キリスト教大学）では第6回年次大会（平成13年7月14日）を契機に、日本人英語学習者のために、近似カナ表記という英語発音表記法が提案された。それと同時に従来から用いられているIPAは英語の特徴を把握するには日本語話者には不十分であるとし、新たに、①帯気音（aspiration）、②未開放閉鎖（unreleased stop）、③英語の特徴である二重母音の第一母音にアクセント記号、④音節区分（syllable boundary）の表示、⑤つなぎの表示、という5つの表記を加えたものを「IPA+」とした。そして、近似カナ表記との併用がこれからの「発音重視と音読重視の英語教育」のためになるのではないかとし、提案された。

強い賛同が得られたわけではないので、いろいろな場面で実際に使ってその効果を測定してみようということになった。小学館プロダクションでの月例発音講座、筑波での発音クリニック、東京家政大学、常葉学園大学、広島大学などで実際に試みた。特に広島大学の3、4年生40人強を対象に集中講義をした機会に受講者のアンケートという形でその効果を確かめたところ、かなりの意識改革に及んだことが明らかになった（後半のアンケート掲載部分参照）。

英語発音指導構造改革ではまずアルファベット文字学習を従来のような記憶方式ではなく、近似カナ表記とIPA+で示し、記憶の手がかりと学習者に自信を与えるようにする。以下がその具体例である。

1. 二重母音（Vv）を持つアルファベット文字：A, H, I, J, K, Y, O
2. 長母音：E, R
3. CVの音節構造：B, C, D, G, P, K, T, V, Z
4. VCの音節構造：F, L, M, N, S
5. CCVの音節構造：Q
6. VCCの音節構造をもつもの：X
7. その他の音節構造をもつもの：W

リストにすると次のようになる（Vは母音を、Cは子音を示す）。

A [éi エィ]	音節構造：Vv	M [em エム]	音節構造：VC
B [bi: ビー]	音節構造：V:	N [en エンヌ]	音節構造：VC
C [si: スィー]	音節構造：CV:	O [óu オゥ]	音節構造：Vv
D [di: ディー]	音節構造：CV:	P [p ^h i: ピー]	音節構造：CV:
E [i: イー]	音節構造：V:	Q [k ^h ju: キュー]	音節構造：CCV:
F [ef エフ]	音節構造：VC	R [a:r アーア]	音節構造：VC
G [dʒi: ゲー]	音節構造：CV	S [es エス]	音節構造：VC
H [éit ^h エイチュ]	音節構造：VC	T [t ^h i: ティー]	音節構造：CV:
I [ái アイ]	音節構造：Vv	U [ju: ユー]	音節構造：CV:
J [dʒéi デェイ]	音節構造：CVv:	V [vi: ヴィー]	音節構造：CV:
K [k ^h éi ケィ]	音節構造：CVv:	W [dʌb.lju: ダブスリュー]	
L [el エウ]	音節構造：VC		音節構造：CVC, C, CV:

X [eks エックス] 音節構造：VCC Z [zi: ズィー] 音節構造：CV:
Y [wái ウワイ] 音節構造：CVv

3. アルファベットに表れない英語の音素

アルファベットには全ての音が表れていないというのが、外国語学習者にとっては問題である。

母音にないものには、「ア」に類するものとして, apple [æp.l], hot [hɒt], bird [bɜ:rd], sofa [sóu.fə], cow [káu] があり, 「イ」に類するものには hit [hɪt], 「ウ」に類するものには, book [buk] があり, 「オ」に類するものには law [lɔ:], oil [óil] がある。一方, 子音にないものには, /h-/ (hit [hɪt]), /l-/ (lake [léik]), /r-/ (run[rʌn]), /ʒ/ (usual [jú:.ʒu.əl]), /θ/ (think [θɪŋk]), /ð/ (this [ðɪs]) である。

アルファベット 26 文字の個々の発音を発音記号で理解させ, それと同時に発音記号も音声習得の手段として活用できるように早期に訓練していれば, 新語の発音が分からなくて英語嫌いになるという現象を防ぐことができる。

4. 「予習音読」が決め手

現在, TOEIC や TOEFL が学習目標のようになっているようだが, これらの資格試験では結果だけが知らされるだけで, どこが誤りでそれが何故か又どうすれば誤りをなくすることができるかという教育的ないわゆる形成的評価が得られない。その点では予習音読を早期に習得した発音記号と近似カナ表記を活用して行っておけば授業の際に学習者自身の音読の正しさと誤りがはっきりと分かり, 達成感と充実感が得られる。余談であるが, 日本語には子音連結がないので, try の発音が CCV の発音ではなく, 介入母音を入れて, 「トライ」になりがちである。それをなくすために tr- を「チュ」で表したところ, 英語らしい発音を得られた。また, 弱形語の has は文中では「ス」に近くなることで次のように表したところ, 学習者の英語らしい音読を得られた。

Spring has come. 「スナインゲ ス カム」

5. 段階別英語発音習得法の実践

英語の教科書編集はどうしても文法・文型中心になるため, 一貫した発音指導・音読指導ができにくい。そこで, 10 段階各 10 項目による英語発音熟達法のカリキュラムを構成し, その測定と処方箋を改良しつつある (島岡, 1997)。筆者のささやかな試みが時代のニーズに応えることを祈っている。

6. 大学生の反応—広島大学集中講義から

3 日間の集中講義のあと, 試験を実施したが, その際, 私の講義内容についてコメントか意見などを書くように指示したところ, 以下のような結果であった。ほとんど近似カナについての肯定的な意見と感想であり, 英語の発音指導の際の参考としたい。

(1) カナによる l と r の識別

○最初、カタカナで英語を発音するというのには抵抗があったが、そのカタカナによる発音がしっかりした根拠の上に成り立っており、分かりやすかったので、抵抗はすぐに消えた。特に、今までは難しいと思っていた「l」と「r」の発音がとてもしやすかったことに感動した。「ウレッド、ヌライト」のようなやさしい場面でも「ヌ」と「ウ」を意識すればいいのだと分かったときうれしく思った。このことを実際に使い、vanilla が通じるのか自分で試して、発音を磨きたい。

注：vanilla は「ヴネィヌラァ」のように言うといい。

○近似カナ表記で発音を教わったことで、よりネイティブに近い本物の発音ができるような気になりました。もちろんまだ「難しい」という意識はありますし、単語1つを発音するのにいっぱいになっていて、文章を読むとすぐ Japanese-English になってしまいますが、カタカナで表記された発音を思い出しながら、これから練習を重ねて良い発音で英語が話せるようになりたいと思います。

この3日間という短い期間に大変多くのことを教えていただいたことは私にとってすごく幸せに思います。が、まだきちんと理解しきれていない部分が多くあります。さらに自分でかみくだいて、この知識や学習法など、無駄にしないようしっかりと吸収したいと思います。

英英辞典のおもしろさも教えていただきました。宝のもちぐされにならないよう、これからいろいろな場面で活用し、英語を楽しく学んでいきたいと思います。

○中学校から、今まで8年と少し、英語を勉強してきましたが、どの先生も「発音をカタカナで覚えてはだめだ」と言われました。しかし、発音記号を覚えるのは、中学生にはとても難しく、苦労したのを覚えています。しかし、島岡先生の講義で、カタカナの有効性を教えていただき、僕自身とても新鮮に感じましたし、もっとカタカナを活用していくべきだ、ということ強く実感しました。というのも、僕自身、大学に入ってから「発音」というものの奥深さ、というか、難しさにぶちあたり、とても落ちこんでいた時期があったからです。しかし、先生が「発音はみんなうまくできる」という言葉が胸に響いてとても自信ができました。「島岡先生のような先生とずっと早く出会いたかった」という思いがわいてきたのと同時に、「島岡先生のような教師になりたい」と強く思いました。

○今まで「l」と「r」の発音を区別するときに「r」の方ばかり気にして、「r」のときは、舌を巻くという風に考えていました。しかし、今回先生が教えてくださった方法は、その全く逆で「l」の発音こそ気をつけねばならないという考えが、とても新鮮で、またとてもわかりやすかったです。正直言ってはじめはカタカナで表記された英語の発音はどこか日本語離れしていないというか、本当に英語を発音している気がしませんでした。しかし、むしろ、先生が教えてくださったカタカナのカタカナの表記の方が、はるかにわかりやすく、そしてはるかに英語として適用するのだと感じました。今もまだ単語のスペルと発音があまりにも違うのでどうしても見たままを発音してしまいがちになるのですが、「目」ではなく「耳」で英語を覚えることの大切さを知ることができて、本当によかったと思うし、そんなチャンスをくださった先生に本当に感謝しています。

(2) 発音記号にカナの使用

○私は今まで、英語の発音をカタカナで表すことなんてできないだろうと思っていましたが、今回先生のお話を聞いて、こんなにも忠実に表記でき、しかも実際の発音にも有効かつ実践的な方法があるのか、と大変驚きました。まさに常識を覆される思いです。現代の英語教育におけるリスニング、スピーキングの問題を解消に大いに役立つのではないのでしょうか。この表記法がもっと広く知られるべきだと思います。

○まさか英語の読みを全てカタカナで表記するのにはビックリしました。とても新鮮で面白かったです。けれど文字ではカタカナが読めても実際口にしてみると発音できないのが悔しいです。

今回の講義をうけて、以前より英語を身近に感じることができました。リズムカルにやっていけば楽しいし、自然と頭に入ってくる感じでした。3日間ありがとうございました。

○カタカナ表記で中学校の時習っておけば、もっと英語の発音がよくできただろうなと思いました。また、歩きながらリズムにのって話す方法は、流れのよいしゃべり方、どこにストレスをおくのがよく分かってとても勉強になりました。「l」と「r」の発音は昨年イギリスに留学した時、ホストファミリーによく言われていました。ちょっとした発音で意味が変わってくるので、発音はとても大切だと思います。

○私の一番苦手な部分（あるいは今まで受けた教育であまり教えられなかった部分）について、とても分かりやすく学べ、とても有意義な集中講義でした。カタカナのおかげで確かにr, lの区別ができるようになりました。

○英語の発音をカタカナ表記にして発音するというやり方はすごく感動した。私自身、いままで発音記号がかんぺきに正確に読めるというわけではなくて、発音に対してすごくあまいにしか考えていなかった。しかしカタカナ表記のやり方を学んだ今は、どんな発音のむずかしい単語でもネイティブに近い発音ができるのではないかという気持ちになった。授業の方では、最初のカタカナで音声を表すところはわかりやすかったが、徐々に専門的になってきたらあまり分からなくなってきた。

○カタカナを使って発音を表していくという先生の考え方は、今までと違ってすごく新鮮なものだった。カタカナにもいろいろな細かいポイントはきちんとおさえられていたのですごくいいと思った。

○今まで、日本語と英語は違うものだから英語学習で、特に発音の学習においてカタカナを使ってはいけないと思っていました。だけど、先生の授業を受けて、これはカタカナを使わない手はないな、と思いました。とにかく分かりやすい!! 発音に対するコンプレックスを昔から持っていた私ですが、これならなんとかなりそうです。子供たちにも分かりやすいと思います。たった3日間で、あっという間だったので飲み込みの悪い私は、まだ授業の内容がカンペキには理解できていないようです。だけど、あと何日かすればマスターでき、自分のものになるでしょう。というかしてみせます。3日間楽しく（笑いあり）授業ありがとうございました。

注：lとrの区別をすることを目標とするなら、その区別をできるようにするために、日本語話者に最も馴染み深いカナを工夫して使うのがよい。しかし、カナ表記を

禁止するクラスでは IPA 十として、経過音として、l の前に n をつける。r の前に w をつけるような方法も役に立つ。

○今回の講義で近似カナ表記を知ることができたのが、私には一番の報酬でした。先生が最初におっしゃっていたように、私もカタカナ表記による英語の発音はいけないものだと思っていました。でも、先生がたくさんの研究をされた結果としての近似カナ表記を教えていただいて確かに英語の発音として成立しているのを感じました。英語の教員に求められるのは、英語をいかにおもしろく、そしていかに上手に教えるかだと思います。

○うまく英語を発音できないものかと思っていたので、講義を受けて、いくらか発音が上達し、大変うれしいです。最初は「先生が講義中に近似カナをつけて書いてくれた単語しか、読み方が分からない」と思っていたのですが、だんだんと共通性を見出し、いろんな単語を格好よく話せるコツがつかめました。

私が中学・高校生の頃、何の影響か（また自分の思い込みか）分かりませんが、英語の発音を教科書の単語の下に書くことはタブーみたいになっていました。それが聞き取れるままに書くことはなおさらまちがっていると言われたような気がします。だから今までカナをさけてきましたが、カナを利用した方が便利だし、上達も目に見えて楽しいし、分かりやすいです。

○私は昔から発音記号を読むのが得意ではなかったのですが、カタカナ表記の発音記号は分かりやすくてよいと思いました。

○この講義をうけて、最も衝撃的だったのが、カタカナによる発音表記です。前から私は辞書を引いて、発音記号をみても、どのように発音すればよいのかが分からない単語に出会うたびに「こんな記号じゃなくてもっと分かりやすいものがあればいい」と思っていました。やはり日本人なのだから日本語で書いてあるのが一番なのですが、カタカナ表記はタブー視されていましたし、milk をミルクと書いてあるような辞書では勉強になりません。今でも時々苦労します。

注：milk の近似カナ表記は [メウッ] と表す。

ところが、先生の近似カナ表記は、はっきり言って分かり易い！ なぜ今までこのような考えが出てこなかったのでしょうか。英語を習い始めたばかりの中学生には IPA のような発音記号は難しすぎます。学校の先生がお手本となるような英語をまるでネイティブのような英語を話せるかと言えば、必ずしもそうとは言えません。ネイティブの発音を、日本語で学べる近似カタカナ表記をもっと普及させるべきではないでしょうか。

これから英語を勉強し、そして将来教える立場になった時も、辞書と共にこの講義で使った「ラミネート版」を持ち歩こうと思います。

○授業の内容は将来教壇に立ったときに役立ちそうな内容だと思いました。特に発音は生徒のお手本となるべきものなので、この講義で学んだ近似カナ表記を生かしながら、もっと上手になるように努力していきたいと思います。

○私にとっても、カタカナでの英語表記は、今まで避けていた分だけ余計に、逆に言えば新鮮でした。「ヴ」なんて言われてみれば確かに「f」ですよね。後は t を「ト」と読まずにすむ表記「ト」とか [θ] [ð] を「ス、ズ」と小さく書く表記とかがあれば今度から小学生にも英語を教えなければならないので、とても楽というか、相互に理解しやすくなると

思います。

私は音楽研究室に所属しているので、イタリア語やドイツ語にも触れる機会が多いのですが、今回のこの近似カナ表記を応用させていただこうと思いました。

○英語を学ぼうとするととき独特の発音や莫大な数の単語に圧倒されそうになるが、カタカナ表記や2000語で言い換えることのできる10万語などにとって「気楽」に英語に親しんでいこうとする姿勢が芽生えるのではないだろうか。IPA + (i.e. 帯気音を [h], 未開放破裂音を [-], 音節の切れ目を [.] で示す) により自分自身の発音に進歩があったのは言うまでもないことだが、将来自分が教壇に立ったとき、生徒の既習事項から英語にアプローチしていけば苦手意識を取り除くことも大いに期待できる。何よりも自分自身の英語に対する親近感が増した。

○英語の発音がどうやったら上手になるか、またそれをどのように生徒に教えていけば良いのかということは僕にとって1つの課題でした。ある単語の発音を教えようとしても、僕の発音を真似るようにさせてもなかなか伝わらない時もあります。今回の集中講義でそれを解決する方法が分かったような気がします。舌先や唇を使うといった place や manner を教えることは今までやったことがありましたが、今まで僕にとってはナンセンスだと思っていたカタカナ表記を使ってここまで正確な発音を身につけることができると思います。

○この3日間の集中講義を通してやはり発音のカタカナ表記というのは私にとってすごく新鮮でした。これまでカタカナ表記はいけないものだと思われずずっとそう思っていたので最初は驚きました。でも実際カタカナ表記を見て発音すると、より英語らしい発音が出てよかったです。r や l の発音も発音記号だけだと、頭では理解しているつもりだけど、口に出すとできていなかったりというのが多かったのですが、カタカナによって発音のコツみたいなものがつかめたような気がします。

○先生が研究されたカナ文字表記による発音指導は僕の英語観を変えました。カナ文字で英語がより上手に本格的に発音が出きることを知って、カタカナを用いての発音指導に対する「御法度」はただの誤った認識だと気づきました。

○今まで発音記号とか音節とか全く分からなくて、勉強する気になかなか出来なかったけど、この授業をきっかけに興味を持つことができました。今回の授業は自分にとってまだきっかけでしかないのこれから今回先生に教えていただいたことを何度も復習し、自分の知識として獲得し、さらに学んでいきたいと思いました。

○発音記号を読んでもうまく発音できなかったのですが、変わったカタカナ表記は分かり易かったです。でも、l と r の違い、pr-, -try などまだまだ修行が足りないのを痛感しました。

注: l と r は「ㇿル」と「ㇿル」で区別する。pr は price などは「ㇿアイス」とする。

try は「チュアイ」とする。/tʃwaɪ/ も可。

○今までカタカナ表記での発音はあまり見たことがありませんでしたが、実際に使ってみると確かに英語らしく発音できるので、とてもいいと思いました。もっとたくさんの人がカタカナ表記でも勉強できたら、もっと正しい発音に近づけるだろうと思います。また、一つ一つの発音を詳しく見ていくことで発音が変わったりつながったりする理由がだんだ

ん分かってきました。歩きながら文を言うことで、英語はリズムの言語なんだなあということを実感しました。

○カタカナで表記することで、英語らしく発音する方法と言うのがとても分かり易かったです。発音は苦手だったので講義で先生が話された方法で、もっと練習していきたいと思っています。先生の講義はとても楽しく興味深く聞くことができました。

○カタカナで発音することによって、こんなにも英語らしく読めるようになるとは思っていませんでした。中学生にとって発音記号は少し抽象的すぎて難しいと思います。そこでカタカナの発音で学ばせる方がすごく効果的です。とてもためになりました。

○特に近似カタカナで英語の発音が表記できるのはまったく新しい発想で、不思議なうえに分かりやすかったです。英語教育にカタカナは使ってはいけないと言われていますが、使えるものは使った方が教える方も習う方もわかりやすいということが分かりました。英語科教育の新しい糸口を見つけることができました。

○私は今小学6年生の子どもに英語を教えています。カタカナで表記するのだけはさけようとしていたのですが、先生の近似カナを利用してよりよい発音を教えていこうと思います。

○中学のとき、教科書にカタカナで読みをふるのはよくないと思っていた。しかし、近似カナを発音の習得に使うことは、その方法の1つとしても有効だということを実感しました。red light は「ウレッド ヌライト」のように。

とくに、中学生なので英語を学んで間もない学習者たちに教えるときには便利だと思いました。日本語的な発音しかできない「おじさん」や「おばさん」たちにも有効かもしれません。LとRの発音は区別するのがずっと難しいと感じていましたが、先生の方法ではだれでも区別することが出来そうで、革新的な発明ですね。

○私はこの授業を受けて初めてlとrの明確な発音というのを理解することができました。今まで、全く分からなかったものが、カタカナ表記によって自然とlの音を出せるようになりました。小さい「ヌ」が入ることで自然とlの発音の位置に舌がいくのが分かって感動しました。私は中学生のときから発音が苦手だった。田舎だったからか逆に英語の発音をしようとするのが、男の子からからかいの的だったし、先生自身からも発音を習ったことはほとんどなかったので、今も全くの日本語発音です。だからすごく発音するのが恥ずかしく、難しく思っています。自分が発音が下手なのは分かっていたけれど、今日は強く自覚しました。でもlの発音が少しは出来るようになって英語で会話することの楽しさも今日初めて分かることが出来ました（原文まま）。私も外国の人と話せるようになったり、人前でも堂々と英語の発音ができるようになりたいと思います。島岡先生、そのような風に思えるようなチャンスを与えてくれてありがとうございました。「カタカナ表記」をこれからもっと知りたいです。

○すごく勉強になりました。カナ表記は分かりやすいし、いいなと思いました。家庭教師をしている子にも教えようと思います。

○私も中学生に英語を教えることがあるのですが、「ミルク」の発音をどう表記すればよいのかわかりませんでした。それを「メウッ」とするなど、今回の講義はすごい発見だと思いました。中学生は英語らしい発音をはずかしがってあまりしようとしませんが、分

かりやすく教えてあげれば、ちっとも苦痛にならないのではと思います。教師をめざす一人として、子どものためにも楽しく英語を学べるようにこれからも考えていきたいと思えます。そして先生の教えてくださったことを生かしていきたいと思えます。

○カタカナ表記や発音の勉強が楽しかった。小学生に教えられる程度の（原文まま）英語レベル（発音）がほしいが、そのためにも英語の体系などを知らなければならぬと改めて考えさせられた。

注：英語の音声体系については母音の3.3四角形と子音の3.3四角形が分かりやすい。

乞参照：『英英和辞典』の発音解説（2002）。

○この授業の中で英語の発音のカタカナの表記という新しい教育方法を学ぶことができました。私は今中学生の家庭教師をしています、教科書やワークなどに発音の方法（どこをつなげて発音するかなど）が掲載されてる点に大変驚いていました。今の教科書は私たちが中学生だった時よりもずっと「より native に近い発音」で英語を話すことができるよう工夫されているなあと思っていたところです。日本語と英語とでは子音と母音のつながり方やリズムの有無など異なる点が多くあり、日本人が英語をうまく発音するにはそれなりに工夫が必要だと思いますが、その問題を克服するにはやはり英語教育に携わるものが必要で、しっかりした意識をもって英語に接していくべきだと改めて感じました。3日間という短い時間でしたが、先生の楽しくかつ英語に対する考えが変わるようなお話を聞くことができ大変光栄に思っております。

○今までカタカナを用いて英語の発音を学ぶことは邪道と学んできたが、今回の講義で、カタカナも用い方によれば、カタカナとしてではなく、英語の発音記号としても用いれることが知れて（原文まま）、自分にとってとてもとてもプラスになった。これからも、このような発見を大切に頑張っていこうと思いました。

○専門語を使わない専門の授業でとても分かりやすかったです。大学に入ってから講義は常に受け身になってしまい、自分で考えることが少なくなっていたのでいい刺激になりました。

○カナ表記について、あまり好ましくないという印象があったのですが、太さ、大きさ、位置を工夫し、「ヴ」という新しい字を発見した島岡先生のカナ表記は従来のカタカナ表記と違って、分かりやすく英語らしく発音できるので、カナ表記についての認識を新たにしました。

注：「ヴ」は濁音でvに対応するので「ヴ」とすると清音になりfに対応する。

一人一人丁寧に発音を指導してくださり、自分の発音に自信がもてるようになりました。アルファベットを言ったり、英語文を読んだりするのはとても効果的だと思いました。

○英語の発音をカタカナを使って表記できるなんて、とても驚きました。そして、本当かなーと半信半疑でその通り発音してみると普段の自分の発音よりもネイティブの発音に近く聞こえてうれしくなっていました。中学からこんな風に教えてくれたらいいのと思いました。LとRの発音も全然できなくて、今も余りよく聞き取れはしないのですが、「ㄣ」をつけたり、「ㄣ」をつけて発音を習い、少しコツがつかめた気がしました。あとリズムは強弱をきちんと理解して文を読むと、きちんと強調したいところや気持ちが伝わ

てくることもわかりました。日本語は平らなので、私も英語を読むとき、ついそうなりがちなのですが、リズムや強弱に注意して読んでいきたいと思います。音声はあまり勉強したことがなかったのですが、この授業を通してとてもおもしろく興味を持ちました。

○高校までに習った英語でネックだったのはやはり発音でした。文法は好きだったのですが、どうも発音は苦手で嫌いでした。しかし、この3日間先生の講義のおかげで発音に対する見方が180度変わりました。中学で使ってはいけないといわれていたカタカナを使うことに最初は抵抗がありましたが、今はとても理解しやすくおもしろいと思っています。

3. pl- などの子音連結の発音について

私が驚いたのは、please の発音の説明でした。今までは完全に p から発音していたからです。先生の言われる通り l の構えから発音すると、確かに今までとは違ったものに聞こえました。違いが自分でも分かることで、変化に対する喜びを感じることができ。小さなことでも、私にとってとてもよい経験になりました。

注：please はまず舌先を歯茎につけてから p の発音をする。また l は p の影響を受けて無声化する。無声化の l は ○ を l の下につけて [pli:z] のように表す。

(3) recently の発音

○先生の講義はすごく興味のもてるもので楽しかったです。例えばカタカナの表記は、今までありそうでなかったもののようにとっても分かりやすく発音が苦手な私はどこに気をつけたらよいか一目でわかりました。recently の発音の時は苦労したけど、どのようにしたらいいということが分かったので楽しくて一人で何度も繰り返していくうちに少しコツがつかめたような気がします。私は文法とかより発音、英会話というものについて学びたかったので本当にこの講義はためになりました。

注：recently の t を発音しようとするとき、-tly は tree のようになるので、むしろ t を () 内に入れる ODP 方式 (2001) で行くと l の音が出しやすい。

(4) リズムの習得

○リズムを体で感じつつ、表現するのはすごくためになったし、おもしろいことだなあと考えた。文字を読みながら発音すると目で文字を追うことにとらわれてしまっている自分に気づいた。と共に、一字一句を発音しようとしてしまうので、肝心なリズムがなくなってしまうこともわかった。

(5) その他

○ Thank you so much for coming to this university from Ibaraki!! Although I was not officially allowed to take this class, because of my late registration, Prof. Ozasa kindly allowed me to attend your wonderful lecture series. I really enjoyed learning English, about English and through English.

I can't stop saying how lucky I have been to be able to study with you for three days!! I'll e-mail you and tell you how I'll be doing. Again, thank you very much for teaching us.

7. まとめと展望

英語を身につけた日本人の多くは音読をよくやっていた。少なくとも英語の音声を重視していたことは確かである。英語の学習で障害になるのは、英語の綴り字が複雑であり、単語を構成する文字列は音読の手がかりになりにくいことである。例えば、a という文字が e に先行されると、ea の発音が meat, head, great, create, preamble, year など様々に読まれる。一方、/i:/ の音を表すに、feet, machine, supreme, piece, peace, believe, receive, Egypt, amoeba, key, quay, people などのように、様々な表し方がある。

そこで、規則的な発音記号を手がかりとすることが考えられるが、IPA の学習は依然として、日本には根強い抵抗感と学習負担増という印象をもたれがちである。太田 (2000) が指摘するようにデンマークの初年度用の英語のテキストにはすべて発音記号も掲載されているそうであるが、日本ではまだ道遠しである。やはり、母語使用によって馴染んでいる近似カナ表記を使うことがよいのではないだろうか。しかしそれと同時に、より自然な英語習得に役立つ、IPA + (IPA に帯気音、未開放破裂音、音節の切れ目、語間つなぎの印を加えたもの) を併用することが有力な手がかりになる。

今後は、学習者に目標達成感を与えるために、発音の熟達度を測定し、学習者が誤りがあればどうすればよくなるかという処方箋のようなものが必要である。今後はさらに実験を続けて改良していきたい。広島大学での集中講義の時、出席者の 3, 4 年生の 40 名 (2000 年 8 月 8 日実施) に感想を書いてもらったところ、特に近似カナ表記についての肯定的な考えが示された。

英語学習の構造改革の出発点は、アルファベット文字の学習時期に、近似カナ表記と IPA + との併用によって文字と発音との関係を確認させ、発音に自信をつけさせることがあることが明らかになった。それによって、それ以降の学習との継起的発展が生かされるであろう。また学習負担がぐっと軽くなり、近似カナ表記によって予習音読が進み、IPA + によってより英語らしい音読が得られることが期待される。

参考文献

- 青木昭六・島岡丘 (1995) 『サンシャイン英和辞典』開隆堂。
長谷川潔ほか (1987) 『プロシード英和辞書』ベネッセ。
太田朗 (2000) 『私のグランドツアー—英語教育「再考」の資料』丸善。
島岡丘・鳥飼玖美子 (1993) 『リトルスター英絵辞典』小学館。
島岡丘 (1996) 『中間言語の音声学—英語の「近似カナ表記システム」の確立と活用』小学館プロダクション。
島岡丘 (1997) 『カナ活用—英語のリズムとレダクション〈補：英語発音熟達度チェックリスト〉』洋販出版。
島岡丘 (2000) 『英語教授法の基礎研究—DF 理論の適用性』(茨城キリスト教大学出版助成金) 非売品。
島岡丘・小林祐子・宮本明夫ほか (2002) 『ワードパワー英和辞典』増進会。
島岡丘・レバグーマリ・三上司編 (1998, 2000) 『英語の発音と表記, No.1, No.2』英語発音表記学会 (EPTA) 機関誌。
島岡丘 (2001) 『点がとれるリスニング上達法』河合出版。
鈴木寿一 (2001) 「書評」『英語教育』p.88。大修館 8 月号。

- Roach, Peter and James Hartman. (1997) *The Daniel Jones English Pronouncing Dictionary*. CUP.
- Upton, Clive, William A. Kretzshmar, Jr, and Rafal Konopta. (2001) *Oxford Dictionary of Pronunciation*. [ODP] OUP.
- Wells, John C. (2000) *Longman Pronunciation Dictionary*. Longman.

Kana as Interlanguage and the Students' Response

Takashi Shimaoka

This study is based on my three-day lecture given at Hiroshima University in the summer of 2001. The students who attended my class showed interest in the phonetic aspect of English, particularly in learning how to transcribe its sound features using the Approximate Kana Transcription (AKT). In the first part of my paper I mentioned that in the case of English there is a wide gap between sound and spelling, and that to remedy this I proposed the use of IPA+or AKT which regularly represents English sound features. The rest of the paper is about each of the 40 attendants' own comments and feelings. It was found that almost all of them were pleased to know that all the English phonemic contrasts could be produced easily by AKT, and that their confidence in oral expression was enhanced by the use of IPA+or AKT.